

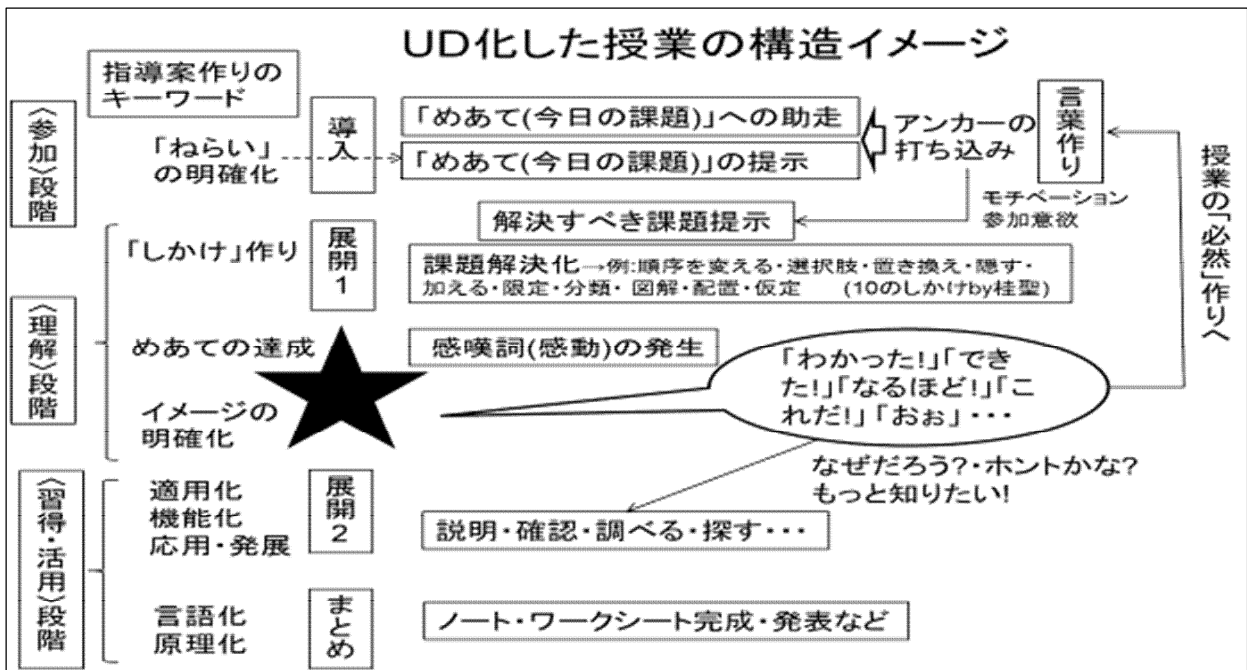
研修テーマ「つながり合い 学び合う 子どもたちの育成」

- 1 開催日時 平成27年6月23日(火) 10:35~16:45
- 2 開催場所 八頭町立安部小学校, 鳥取市立修立小学校
- 3 アドバイザー 明星大学 小貫 悟 教授
- 4 公開授業に対するアドバイス(改善案の提示)
 - (1) 安部小学校 2年国語「ふろしきはどんなぬの」

指導案作りの キーワード	構造提案(2年)国語 ふろしきはどんなぬの		アンカーの 打ち込み
〔参加〕段階 「わらい」 の明確化	導入	助走: 文章とカードの模造紙「そっくりだね」⇒「違うよ〜」 「先生は〇個違いを見つけました。みんな先生と競争しよう」 めあて: ちがいをできるだけ(先生より)たくさん見つけよう	授業の「必然」作りへ
	展開1	課題提示: 本とカードのちがいの表を作ろう 解決プロセス: ・「先生の考えを一つ言います」⇒題名の違い(モデル) ・ノートに書きだしてみよう ⇒一人ずつ言ってみよう「あ〜!!」 「〇個まであと何個?」⇒「もっと見つけよう」	
〔理解〕段階 「しかけ」作り	めあての達成 イメージの 明確化	たくさん「見つけた〜」	
	展開2	・「〈わけ〉を書くときボーナス得点だよ」 〈モデル〉題名⇒カードは「便利さ」を一番伝えたいから ・たくさん〈わけ〉が見つかったね ⇒ みんなの勝ちだね ・探偵になってみよう「どんな人が読むといいのかな?」	
〔習得・活用〕段階 適用化 機能化 応用・発展	まとめ	文しょうとカード違うわけは カードは〇〇の人に読んでもらいたいからで、 本は〇〇の人に読んでもらいたいからです。	
	言語化 原理化		

- (2) 修立小学校 2年算数「かくれた数はいくつ」

指導案作りの キーワード	構造の提案(2年生算数 はじめの数)		アンカーの 打ち込み
〔参加〕段階 「わらい」 の明確化	導入	助走: バスと子どもの数 子どもがあつまっています。9人きたので30人 になりました。はじめは何人いましたか。 どうやって⇒図で※作戦省略 めあて: どんなふうに図であらわしたらいいのかな?	授業の「必然」作りへ
	展開1	課題提示: 一番良い図はどれだろう。 解決プロセス: ※各自ノート・共有化の省略 ・〈きた数〉〈はじめの数〉〈ぜんぶの数〉のピース組み合わせ3つ ・3つの図のどれがいいのかな? ⇒ ①②③の三択 ・ヒント「教科書の図に3つの言葉を書きこんでみましょう」	
〔理解〕段階 「しかけ」作り	めあての達成 イメージの 明確化	(自分はこの図だ!!)	
	展開2	・どうして? (①と②はなぜダメなの?) 共有化 ・式を書こう ⇒ $30 - 9 = 21$ 確かめてみよう。 ・適用問題: シールをもってきました。お兄さんからシールを6枚も らったので、24枚になりました。はじめは何人いましたか? ・図 ⇒ 式	
〔習得・活用〕段階 適用化 機能化 応用・発展	まとめ	・言葉の式で書いてみよう。 $ぜんぶの数 - ふえた数 = はじめの数$	
	言語化 原理化		



(1) 子どもが考え続けるサポートをすること

UD化の3つの視点を入れたらUD授業になるとは限らない。視点を入れるのが目的になってはいけない。

(2) 山場は「乗り越えた」「心が動いた」ときに起こる

きちんと考えられた展開であるにもかかわらず、なぜ山場にならないのか。それは全員が壁だと思っていることに取り組んでいないからである。また、授業をUD化するにあたって、最大のテーマは「統合」である。バラバラの情報をいかに関連させるかがポイントである。

(3) 山場までの時間は20分

児童の集中力の持続を考えると、20分が限界である。したがって、20～25分で授業をつくる。それ以上のばしても、できた児童にとっては無駄な時間、できない児童にとってはつらい時間になってしまう。

導入部分を除けば、山場まで15分。制限を設けた方が展開を考えやすくなる。

(4) めあてとねらいは違う

ねらいは教師が授業全体を捉えてもつもの、めあては子どもの目印である。もっと焦点化すべきである。

例えば本時なら、「どんなふうに図で表したらいいのかな。」というように具体的でわかり易い方がよい。

(5) できる子が退屈になって我慢する授業はUDとはいえない

算数の授業であれば、図・式・ことばが関連して理解することになるが、図の3択で全員参加をさせ、ことばで説明する場でできる子どもの力を借りるというように、それぞれの活躍の場を設けていくとよい。

展開1で全員理解させようと思わないことも大切である。適用問題に進まないと、「わかった！試してみたい。」という児童は満足できないし、わからなかった児童もそこでわかることもある。45分終わったところで勝負だと思えばいい。いつまでも最初の問題を分からせようとする必要はない。

以上のように、小貫先生が全国の小中学校でたくさんの授業を参観された上で、研究者としての立場から提案された内容は、これまで自分たちが行ってきた授業展開とはかなり異なるものであった。子どもたちの集中力の持続時間という科学的根拠からくるアプローチには説得力があった。「山場を20分」とする展開に挑戦していくことで、「できた・わかった」子どもたちを増やし、互いに学び合う授業の実現に迫ることができるという手応えを感じた有意義な研修会となった。